

# 井上円了『世界旅行記』補遺

## 第一回欧米視察の旅行日録

### 三浦節夫

*minura setsuo*

平成一五（二〇〇三）年に、井上円了の三度におよぶ海外視察の旅行記が、『井上円了選集』第二三巻として一冊にまとめて刊行された（同書はまた『井上円了・世界旅行記』の書名で柏書房からも出版された）。収録された旅行記は、第一回の明治二二年八月、一二月刊行の『欧米各国政教日記 上・下』（哲学書院）、第二回の明治三七年一月刊行の『西航日録』（鶏声堂）、第三回の明治四五年三月刊行の『南半球五万哩』（丙午出版社）である。また、同選集の巻末には、三度の旅行行程を辿った「海外視察経路図」が添付されている。これらを見れば、円了が明治時代における地球規模の世界旅行者であったことが納得されるであろう。

ところで、三冊の旅行記を比較すると、第一回の『欧米各国政教日記』の記述方法は後の二回とまったく異質であることがわかる。灌田夏樹氏はこの『欧米各国政教日記』について、つぎのように指摘する<sup>1)</sup>。

『旅行記』という呼び名は、この最初の書物には、言葉の本来の意味では当てはまらないかも知れない。ここでは、日録的な性格が徹底的に削られており、ひたすら、西欧宗教事情視察の『報告書』であろうとしている。

それは、著者が、『懷中日記』から『日月地名ヲ除キ去リ専ラ宗教風俗ニ関シタル種目ノミヲ取り出シ』て編んだ、事項本位の冊子であった。もともと旅行記を残す意図はなかったらしいのだ。

六一年におよぶ円了の生涯において、この第一回の海外視察は彼の思想と行動を変えるほどの大きな影響を持ったものである。そのことは円了自身が、「欧米各国の事は日本に安坐して想像するとは大に差異なるものなり」(2)、と帰国後に語っていることとわかる。そして、第一回の「旅行記」では瀧田氏も述べるように、円了がつどこで、なにかから、どのようなことを見聞し、どのように感じたのか、そのことが具体的にはわかりにくいという問題も残る。

本稿はその問題に対して、新聞・雑誌に残された資料を参考とし、第一回欧米視察の旅行の具体化を試みるものである。でき得る限り資料を紹介し、引用にあたっては、変体仮名、カタカナはひらがなに、漢字は通行体に統一したい。さらに適宜に句読点を付け、改行をおこない、「」に筆者の注をいれることとする。

## 一 出発前後

円了の「洋行」を最初に報じたのは、明治二十一年五月二日の『令知会雑誌』であり、つぎのように書かれている(3)。

「○会員井上円了君は哲学研究、宗教取調の為、近々洋行せらるゝ由」

この洋行の公表から一七日後に、円了は横浜から出発しているので、あわただしく告知や送別会がおこなわれている。哲学館の館主として、つぎの告知が出したのも、公表から四日後の同月二十五日付けである(4)。

「小生儀、今般政教の關係及び哲学の実況視察の為め、欧米各国へ回航致候に付、不在中は館主の任を榎橋一郎氏に依托候。尤も帰朝は来年五月頃にも可相成候。其間欧米各地に於て見聞する所、別して哲学上に関したる事件は大小となく通信報告可致候。妖怪及び哲学講義の未だ終結せざる部分は、航海中相認め講義録に掲載する

心得に候也。

明治二十一年五月二十五日

館主 井上円了

この告知の翌日（二十六日）に、八十余名が参加して円了の送別会が開催されている。その模様はつぎのように報じられた<sup>55</sup>。

「○井上文学士の送別会 去る二十六日は兼ねて本誌に記したりしが如く、浅草本願寺別院に於て、井上文学士欧米巡回の送別会を開かれたるが、此に会する者八十余名にて、先づ高橋寛雄氏が発起者総代として井上文学士を送るの一文を朗読し、次に吉谷寛寿氏が哲学上に付仏教と西洋哲学との区別あることを演説し、次に井上氏が立ちて諸氏来会の厚志を謝し、就て今度欧米巡回の目的を述べられたり。

其目的は政教の關係及び哲学の実況視察の爲にありと雖とも、中に就き大目的とするは政教の關係にあり。近來吾邦政治の進趣大方ならず、殊に二十三年国会開設の事も近きに迫りたれば、政教の關係は社会の一大問題となること疑がひなし。去れば政教關係の吾が仏教者、否吾愛国者の尤とも注意すべき事なり。

之に依りて、今般の巡遊を思ひ立ちたるにあれば、予が目的とする所は学理的の事にあらずして、實際視察の爲なり。附たり哲学の実況をも視察のなし得らるゝ丈をなすの見込みなりとの意を述べられ、夫より佐々木狂介、多田賢順、村上專精、其他諸氏の演説ありて、頗ふる盛会なりし。

又同日夜間、令知会友及び知友の発起にて、柳橋の柳光亭に送別会を開かれたるが、島地黙雷、佐々木祐寛、大谷勝道三師を始め二十余名の会合にて、是また盛況を極めたり。但し井上氏の巡回は来月上旬に吾邦出發し、凡そ一ヶ年間の予定なりと云ふ」

送別会はこの二十六日以外にもあり、翌六月二日に哲学会員の発起で開催されている。円了の第一回欧米視察

の主たる目的は、さきに見たように、「政教」の関係、つまり欧米諸国の「政治(国家)と宗教」の関係を調査することにあつた。当時、仏教界をはじめとする宗教関係者のなかで、欧米の事例も知らず、またそれに関する文献もなく、国会開設を間近にしたこの時期の緊急の課題でもあつた。この「實際上」の問題をどのようにすべきかが円了の問題意識のなかにあり、そのためもあつてか、出発の直前にあたる六日夕方に、円了は井上毅、尾崎三良、平田東助などの内閣法制局の主立つた関係者と、日本における哲学や宗教についての意見交換をしているのである<sup>(9)</sup>。そして、つぎのような広告を各種の新聞に出して、円了は欧米視察へ出発した<sup>(7)</sup>。

「八日午後四時、新橋発汽車にて欧米周遊の途に上る。右辱知諸君に報す。井上円了」

新橋から横浜に移動した円了は、九日にイギリス船・ゲーリック号に乗船して、太平洋へと出航した<sup>(8)</sup>。なお、この旅行には真宗大谷派(東本願寺)の「勸令使」の宮部円成が同行している。<sup>(9)</sup>

このようにして、円了は仏教界などの大きな期待を背負って、洋行の報道から二〇日後というあわただしさで視察旅行に出たのである<sup>(10)</sup>。

## 二 旅行中の報告——アメリカ編

当時の旅行の移動手段は、船や汽車などであり、円了の日本への郵便による報告の手段もそれ以外にはなく、報告が新聞・雑誌に公表された時期は投函から早くて一か月後、遅くて数か月後であつた。残されている円了の海外からの通信は少ない。第一報はつぎの哲学館の広告である<sup>(11)</sup>。

「館主井上円了氏は六月二十四日、無事に米國桑港〔サンフランシスコ港〕に着せられたる由、本月〔七月〕二十日報知ありたり」

日本からアメリカへの船内の日記は、円了も創立者の一人であつた政教社の雑誌『日本人』に、つぎのように掲載されている<sup>12</sup>。

「○井上円了の欧米周遊日記　社員井上は去る六月二十四日を以て、海上無恙米國桑港に到着したり。今同人が報道に係る処の海上日記を左に掲載せん。

明治二十一年六月九日十時、英船ゲーリック号に搭し桑港に向ひて横浜を発し、欧米周遊の途に就く。船路内海を出て、稍々東北の方位を取り、房総諸山を左に見て過ぐ。夜七時遙に灯光を波際に隠見す。是れ銚子犬吠岬の灯台なりと云ふ。是れより復た本州の諸山を見ず。舟行平均一昼夜三百英里にして、凡そ一時間十二英里半の速力なり。其後日々東北を指し、十五、六日の頃に至りては、北緯四十六、七度に達す。我千島と其度を同ふすと云ふ。当時寒暖計四十二度に下降し、恰も我東京三月頃の氣候と異らず、故に船室内は蒸氣管を以て暖氣を取れり。

十五日は東半球より西半球に入るを以て、日を西半球の曆に改め、第二の十五日を得たり。蓋し西半球と東半球とは一日を異にし、西半球の十五日は東半球の十六日にして、東半球の十五日は西半球の十四日なり。故に日本の曆日を米国の曆日に改むるときは一日の閏余を生ずる也。即ち第二の十五日を見る也。此第二の十五日は日本の十六日に当る。舟行毎日東に向ふを以て、日出時日々数十分を進めり。大抵一日二十五分の割合なりと云ふ。故に船中にて二十一日正午は、日本にて二十二日朝六時に相当す。

船中の乗客は大凡千三、四百人にして、其中上等客は五十余名也、上等客中には英人あり、米人あり、仏人あり、独逸人あり、印度人あり、支那人あり、日本人あり。就中英人最も多しとす。日本人は六名、支那人は三名、印度人は一名也。其日本人中には神宮司純粹、桐野利邦、高田慎蔵の諸氏あり。下等には支那人凡そ千二、

三百人あり。其他日本人の中等及下等にある者二十七、八名なりと云ふ。

第二の十五日は早朝より暴風激浪夕刻に至て殊に甚しく、船体の動揺一方ならず、殆んど晩食を廃するに至る。此時二、三回の電光を見る。其他は風波共に平穩の方なりし。船中には格別記すべき事情なし。一日支那人と筆談したることあり。支那人曰く、風説に聞く、日本国帝王は耶蘇教に改宗せりと、又聞く明治二十三年以後は日本国政府は米国の政府に倣ひ、国王を撰定すと。果して然るや否。余其無根の説なるを弁明せり。蓋し此の如き説は支那国一般の風説なる由。

船中の西洋人は大抵商人也。香港、上海、横浜等に通商居留する者多し。故に余り上等の品格ある人を見ず。日本人は其上等における者を除いては大抵壮年の書生にして、桑港に留学する者多し。船中には日本物を見ること至て希れなり。唯西洋人中日本服と日本紙と日本紙幣を用ふる者あるを見たり。是れ皆日本に居留したる者ならん。然れども其日本服は西洋人の寝巻に用ひ、其日本紙は糞紙、其日本紙幣は博奕に用ふる者なれば、余り感服せざるなり。

十七日は日曜なれば西洋人中耶蘇信者食堂に会し、十時半より唱歌読経を始め、衆人を誘引したるも、支那人は我れは孔子教を奉ずるものなりと云ひ、日本人は我れは無宗教なりと云ひて出席せず。西洋人中には或は義務なりと云ひて出席するものもありたれども、色々の口実を設けて出席せざるもの多かりし。

一日独逸人と英国人と二組に分れて甲板上に縄引の競争をなしたることあり。其時独逸人の方勝ちを得たり。此の如き遊戯が船中無上の樂なりし。

船にて海上にあること凡そ十六日間なるも、一物の眼光を遮るなかりしが、二十二日の夕陽に当りて雲烟渺茫の間に帆影を見たり。是れ帆走船の洋中に懸る者なり。乗客皆甲板上に出て、之を遠望し、以て一場の快樂とな

せり。

二十四日朝桑港に着す。横浜より舟行の里程四千五百四十五英里なり」

つぎに、横浜出航から一か月後に、アメリカのシカゴへ到着したとの「報告」が、「館主井上氏より左の通り来状ありたり。因て茲に掲載す」として公表されている<sup>(10)</sup>。

「時下愈御勉学奉賀候。私儀去る二十四日桑港着。二十八日乗車。今朝当府に安着致候。途上毎日炎晴にて去る四日には車中暑氣九十八度迄に昇り候。併し一身幸に無事に有之候間安心可被下候。米国は哲学上に関しては格別御報道可申事無之候。尤もニュー、ヨーク府には一週間余り滞在の見込みなれば、精々聞正し、後便に可申送候。草々不悉。

二十一年七月六日

在米州チカゴ府 井上円了

哲学館内外員諸君御中

この報告が八月にあり、その後しばらく円了からの通信はなかった。そのため、仏教界の関係者などから、調査への期待と疑問の意見が出されるようになっていた<sup>(11)</sup>。つぎの欧米周遊日記の第二回が公表されたのは一月である。この長文の日記はアメリカにおける見聞をもとにまとめた評論であるが<sup>(12)</sup>、円了自身はこのときすでに欧州に渡って数か月が経過していた。

「○欧米周遊日記(第二回)

井上円了寄送

凡そ周遊日記と題する以上は、毎日の経歴見聞する所、大となく小となく、一々叙述すへき筈なれども、晴雨寒暖地名等は煩はしく記載する迄のものにても無之哉に考へらるゝ上に、小生の旅行は日数に限りあれば、至りて忙はしき道中にして殆んど筆を執るの暇なき程のことなれば、唯余か思想に感ずる所の一、二を記して紀行と

するのみ。

天、人を制することあり。人、天を制することあり。名山大川寒暖風雨の人心の上に与ふる所の影響は、所謂天の人を制するものなるか。彼の欧米各国の駸々として文明に進む所以のものは、種々の原因事情あるによると雖も、亦天候地勢の其媒介となることなきにあらず。語を換へて之を言へば、天候地勢は欧米社会開進の一要因たるなり。余米州を通過して第一に感ずる所のものは、此天地の社会人事の上に与ふる所の影響、是れなり。

先づ桑港に着し、其地の人情風俗を実察し、次に汽車に駕して山川の形勢を熟視し、以為らく、合衆国の駸々として隆盛に赴く所以のもの、此山川の形勢あるによると。今其所以を述べんに、米人の経画する所のもの、皆広大にして百事百物一として大ならざるはなし。故に余は大一字を以て米国全体の事情を評せんとす。而して此大の大たる所以のものは、余を以て之を観るに、天候地勢の影響によるもの多しとす。

抑も合衆国の地勢たるや、数千里に亘り一大陸を貫き、其大なることは言ふ迄もなく、その間に連なる所のもの、山は即ちロツキーあり、シルバネバダあり、川には即ちミシシッピあり、ホドソンあり。是れ皆世界に冠たる高大山川にあらずや。其湖には北部の五大湖あり、其瀑布にはナイヤガラあり、是れ亦世界第一にあらずや。其高原平野に至りては、数日間車行して山影を見ざるあり、其沙漠に至りては、グリートアメリカンデゾルの如き亞非利加〔アフリカ〕のサハラに一步を譲るも、世界大原の一なること疑を容れず、其海に至りては、太平洋の両大洋を東西に擁し一目万里の大觀を有し、其氣候に至りては、冬夏の寒暖著き懸隔ありて、已にニューヨーク、チカゴの如きは、夏時は百五度以上に昇り、冬時は零度以下に降ると云ふ。実に大寒極熱の地と云はざるへからず。

之れを要するに、米国は天候地勢共に大なり。此に住する人民は、朝に夕に処るに出づるに毎に其大に接し、

其大を見るを以て、おのつから大なる思想を薰育し、大なる経画を養成して、大事大工を成就せしむるに至るや必然なり。斯くして其人々思ふ所行ふ所皆大なる以上は、其国以て富強に其社会以て隆盛に趣むくは自然の勢なり。是れ米国人の富強隆盛に進む所以の一要因なること明かなり。

而して其大独り天候地勢に止まらず、牛馬獸畜皆之れを我邦の産に比するに大なり。果実蔬菜に至るまで皆大なり。桃林檎梅等の諸実瓜葱胡蘿蔔等の諸菜、皆之れを我植物に比するに大ならざるはなし。以上は天然に生ずる所のものなり。若し人造に属するものをあぐれば、鉄車汽船家屋市街製造工業一として大ならざるはなし。人の日夜見聞触知する所の者、此の如く大にして、其人の体格亦之を本邦人に比するに至りて大なり。故に其有する所の思想、自然の勢大ならざる能はず。其人の心身共に大なれば其国の勢亦大なるはおのつから然る所なり。且つ其国の進む所のものを見るに、急速に失せず、軽躁に流れず、泰然として坐し、悠然として進むの状あり、亦山川外情の誘因あることなきにあらず。

彼のロツキーを看るに、決して我邦の高山の如く突起危立するにあらず。自然にして起り自然にして高く、汽車に駕して其高嶺に登るに誰れも其山たるを覚へず。ミシシッピの大なる水量は至りて多きも、其流るゝや決して我邦の河水の如く急速なるにあらず。動かさるか如くにして動き、流れさるか如くして流る。是れ皆知らず識らすの間に、米人の思想を養成すること疑を容れざるなり。

更に顧みて我邦の山河の形勢を見るに、全く米国の反対に出づるものゝ如し。到る処山は皆小、川も亦小、草木禽獸の諸類亦皆小なり。是れ自然に人心をして小ならしむるの媒介となること明かなり。且つ我邦人の進歩急速に失し、軽躁に流るゝの恐れあるも、亦山川の形勢によるや疑を容れず。

而して日本人は其小心の中に秀然として聳ゆる所の元氣あるを見るは、或は又天地の養成によるの感想なき能

はす。即ち我か山川は皆小なりと雖も、其小山小嶺の上に屹立して芙蓉の一峰あり。恰も我大和魂の小心中に秀然たるか如し、芙蓉豈其心を養成するの媒介たらざるを得んや。其今日文明に進む所のもの、或は我邦の諸山諸川の如く急速軽躁に失するの恐あるも、其元氣の万古に徹して変せざる所ありて、縦令外国にあるも支那人の如く金錢の奴隸にならず、日本人の日本人たる名分を重んずるか如きは、芙蓉の屹然として天に聳へ千古形を改めざると同一一般なり。

彼の芙蓉の美や、古来詩人は之を詩に詠じ、画工は之を画に現はし、五尺の童子をして朝夕目に見耳に聞く便を得せしむ。是れおのづから人心を薰育して彼の秀然たる思想を養成するや疑ひなし。故に余は日本人の日本人たる所以のものは米国人の米国人たる所以と共に、山川の形情の媒介によると信ずるなり。

其他米人の美術の思想に乏く、日本人の文雅の風致に富めるは、亦山川の誘因によるや明かなり。米山米川は大は則ち大なりと雖も、其風致に至ては甚た乏く、ナイヤガラ瀑布の如きも実に壯觀を極むと雖も、美術上より之を視れば、是れ又風致に乏しと云はざるべからず。之に反して我邦の山川は小は則ち小なりと雖も、其風致に至りては米国の山川と同日の比にあらず。彼の日光山の勝、松島の勝、厳島の勝、嵐山の勝、山に川に、海に雪に、月に花に、天然の書画を現出し、之を見る人をして知らず識らずの間に、美術の思想を薰育し、詩画の風致を養成せしむ。是れ日本人の雅趣に長して米人の風致に乏き所以なり。且此一例によりても、山川の形勢の社会開進の要素となり、年少教育の一要因となることを知るべし。果して然らば日本の地勢は社会開進の要素に加はりて、一利一害ありと謂はざるべからず。

今や万国対列し相競争するの日にありては、日本従来の美術を樂しみ風致を重んずるの風習は、一たび之を変して米国民の如く実用的の事業を起すこと思想を養はしめざるべからずと云ふものあり。是れ固より余の企

望する所なりと雖も、全く我邦を変して実用的の工業国となすの論に至りては、深く其利害を考へざるへからず。抑も我数千百年來養成せる所の思想風習は、決して一朝一夕に変更すへきにあらず。且つ我か天然に有する所の山河の名勝は、日夜人の心中に美術の思想を注入するを如何せんや。若し我邦人をして全く美術の思想を絶たしめんと欲せば、名山名川の美観も併せて絶たざるへからざるの理なり。

然るに更に顧みて之を考ふるに、美術は目前直接の實用に遠きの恐なきにあらずと雖も、其社会開進上必要なる一大要素なること明かにして、世の文明に進むに従ひ美術的思想及需要は実用的と共に進むべきは、余か弁を待たざるなり。果して然らば、我邦の天然に長する所の美術的思想を変して、独り其容易に実行すへからざる実用的の工業を起さんとするは、我か得策にあらざることも亦明かなり。

之に反して、其天然に存する所の山河の美勝は飽まで之を保存し、其生來有する所の風雅の思想は飽まで之を養成して、将来日本をして美術世界の中心となり、美術を以て世界に鳴ることを務むることこそ却て我邦の得策なりと信ず。而して其実用的の工業の如きは、漸々に發達する方法を用ひ、多年の後に西洋に対立するに至るを期して可なり。

是れ余か汽車中にありて感ずる所なれば、其俣此に記して紀行の一部分となす。」

この「日記」に書かれているのは地政学的見方で、米国の「大」に対して日本の「小」が国民の思想にまで影響していることを、円了は痛感しているし、日本を地球規模で対象的に見ようとしているのである。円了が帰国後に語った「欧米各国の事は日本に安坐して想像するとは大に差異なるものなり」、ということを示す一例である。

### 三 旅行中の報告——欧州編

アメリカからイギリスに渡つた円了はヨーロッパ各国のうちで、イギリス（イングランド、スコットランド）、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリアを視察巡回している<sup>16</sup>。この間に、日本に寄せた旅行の見聞の報告は二つに過ぎない。第一はつぎの「欧州東洋学流行の一斑」という調査報告である<sup>17</sup>。

「近來欧米各国に於て東洋学研究すること大に流行し、各国の大学中に之を兼学する部分あるのみならず、純然たる東洋専門学校あり、仏蘭西（フランス）の東洋学校、独逸（ドイツ）の東洋学校の如きは是れなり。英国に在ては別に東洋学校なしと雖も、ケンブリッヂ大学の如きは、印度学は勿論支那学をも教授せり。伊太利（イタリア）、澳大利（オーストリア）、露西亞（ロシア）の如きも、皆東洋学研究の方法を設けり。唯日本学として専修することを得るは、仏蘭西及独逸の東洋学校なり。

井上哲<sup>18</sup>二郎氏は伯林（ベルリン）なる東洋学校の日本部の教師なり。氏の話に伯林東洋学校は大学の哲学部の附屬にして、其中には、ヒンドスタニー語、アラビア語、トルコ語、ペルシヤ語、亞非利加語等を教授すると云ふ。而して支那学を研究するものは、日本学を研究するものより多く、印度学を研究するものは支那学を研究するものより多し。印度学にも今日の印度語学を研究するものと、古代の印度文学を研究するものゝ別あり。散斯克（サンスクリット）語学の如きは各大学に於て大抵之れを研究せざるはなし。蓋し散斯克語は羅甸（ラテン）、希臘（ギリシヤ）等の語と其源を同うし、今日の欧羅巴（ヨーロッパ）語と其の類を同うするものなり。此を以て各国大学に於て羅甸、希臘と共に此の語学を研究するに至れり。

当時西洋各国に於て東洋学を研究する学校を設けし外に、東洋学を研究する学会を置けり。即ち亞細亞（アジア）協会なるもの是なり。英国に亞細亞協会あり、本局は龍動（ロンドン）市中にあり、會員總計四百十一人、

其中名誉会員三十人なり。南条文雄氏も其会員の一人たり。余一日其会に到り幹事リス、ダビッド氏に面し該会の景況を尋問せしに、氏の勧請によりて余も其会員の一人となれり。曩に余牛津〔オックスフォード〕大学に到り教授マキシミラ氏に面す。余氏に問ふに、当時英人の著作にかゝる仏書中誰の書最もよきや。氏告くるにリス、ダビッド氏の書を以てし、且つ余に介して同氏に接見せしむ。此を以て余亜細亞協会に於て、同氏に面晤することを得たり。マキシミラ氏又余をケンブリッヂ大学散斯克教授カウエル氏に紹介せり。因て余はケンブリッヂに到り同氏に面せり。

氏曰く、余は南条、笠原両氏の旧知たり。笠原氏不幸にして早逝す。南条氏近頃起居如何等の尋問ありたり。ケンブリッヂ大学には支那学教授あり、其名をウエードと云ふ。余嘗て友人添田氏より同氏に呈する一書を携帯せるを以て、幸いに氏に面することを得たり。氏亦余に一書を授け、龍動なる博物館書籍掛ドグラス氏に面晤すへきを告げり。余因て龍動に帰り博物館にて氏に逢へり。

氏は矢張り支那学者にして、支那学に関したる著書数部あり。氏余を導て書庫に入らしめ、庫内に蒐集せる億万の文書を一覽せしむ。氏又余に示すに、近来蒐集せる日本書籍を以てす。其中に種々の日本書籍を見たり。書箱館を一見して博物館に到れば、又数種の日本書籍あり。其中には画本、習字本等も見受けたり。仏書も二、三部あり。同行宮部氏、余に代て其書名を記せり。即ち称赞浄土経一卷、法華経提婆品一卷、無垢浄土経二通、往生要集一卷なり。其隣室に日本の家具、什器、仏器、神棚等を蒐集せり。又別に日本陶器室、日本絵画室の設あり。余一々其出品の名を記せず。

以上の外、各国の博物館に仏像室あり。英国龍動博物館の仏像室には

木像三十種　金藏三種　陶像三種　絵像三種　合計三十九種

あり。其中には釈迦像あり、弥陀像あり、観音あり、勢至あり、不動あり、達磨あり、布袋あり、大黒あり、閻魔あり、善導あり、法然あり、十六羅漢あり、南無妙法蓮華經の題目あり。日本絵画室にも二、三の仏画あり。其中に真宗祖師御絵伝一幅あり。又其室内には大念珠一連ありて、其念珠には京都清水寺の銘あり。蓋し同寺の宝物の外人の手に入りたるものならん。其一々は宮部氏の手帖に詳なり。サウス、ケンシングトン博物館にも日本器物室あり。其中には故大久保内務卿より寄贈せる日本風の五重塔の雛形あり。又大仏の金像ありて、其背に京都所鑄の銘あり。余牛津に到りマキシミラ氏の名刺を携帯して、同大学附属の博物館を一見したる時、其館内に日本仏像数種を見たり。其中に真宗祖師の木像ありし。

次に仏蘭西に到り、藤島了穂氏と共にギメー氏の仏像博物館に到り其館内の陳列品を一見せしに、日本仏像室あり、支那仏像室あり、西藏仏像室あり、印度仏像室ありて、其数幾百種あるを知らず。日本仏像室の如きも、各其宗派の別に従ふて仏像を排列し、真言宗部あり、浄土宗部あり、真宗部あり、一々記名するに暇あらず。因て館長に請ふて其目録一冊を購求せり。次に巴里なる工業博物館に到り、其仏像陳列品を驗せしに、

画像二種	木像四種	金像十一種	合計十七種
------	------	-------	-------

ありし。

次に伯林なる人種博物館に到り、井上哲二郎<sup>(英)</sup>氏の案内を請ふて館内を一見せしに、又日本仏像の部を見たり。其中には木像金像とも三十四種、画像四種、合計三十八種あり。其外に同館内には我国の神道部ありて、神道にて用ふる所の諸像、器具を陳列するを見たり。

次に欧米各国にて、著作及び出版にかゝる東洋書類幾千百部あるを知らず。日本、支那、印度の書類のみにても千百部以上あり。一昨年発布せる龍動書肆トリビュナルの発行書目表によるに、左の部数あり。

日本の言語文学に関するもの十八部

支那の言語文学に関するもの七十七部

印度の言語文学に関するもの三百九十七部

東洋の宗教（仏教、儒教、回教）に関するもの九十九部

此印度の言語文学書中には、仏教の文学書も混入せり。余独逸伯林に在て欧米各国の語にて発行せる東洋文学書類を驗するに、左の部数あり。

日本の歴史に関するもの五十三部

日本の文学に関するもの三十部

支那の歴史、地理、宗教に関するもの九十五部

支那の言語文学に関するもの百二十一部

印度の史類に関するもの百二十八部

印度の考古に関するもの二十部

印度の哲学に関するもの三十七部

散斯克文学に関するもの三百九十七部

パリ語に関するもの三十一部

仏教に関するもの（即ち仏教に関したる西洋人の評論著作）六十二部。而して、仏教書中の散斯克語にかゝるものは散斯克文学書中に入れ、仏教書中のパリ語にかゝるものはパリ語書中に入れたり。

其外、蒙古、西藏、安南、暹羅（シヤム）等の諸国に関する書類亦多し。右の表中西洋人の評論著作にかゝる

仏教書類六十三部の中、

英国龍動の発行にかゝるもの二十九部

同牛津の発行にかゝるもの三部

英領印度 五部

米国新約克 一部

仏国巴里 八部

和蘭〔オランダ〕 一部

瑞西〔スイス〕 二部

魯国 二部

独逸伯林 三部

同ライプツヒ 一部

同ドレスデン 一部

其他独逸地方 三部

なり。其外各国にて他国発行の仏書を其国語に訳したるものあれとも、右の表中には之を除く。

仏經仏書は各国の書籍館中には必ず之を蒐集すと雖も、特別に其書類を蒐集せるは仏国ギメー氏の博物館なり。同館内には仏經を蒐集せる一場あり。印度の仏經、支那の仏經、西藏の仏經、日本の仏經、皆其中にある見たり。又独逸伯林人種博物館にも仏經を蒐集せり。井上哲二郎氏(文)と共に其館内を一見せしとき、仏經の原本新たに西藏国より渡來せるとして衆人來集せるを見たり。哲二郎氏(水)の話に、東洋学校にても和漢書籍、仏書、儒書等

を蒐集せり。縮刷蔵経も近々購求する筈なりと云へり。

以上は、余か洋行日記中に記載せるものにして、その紀行の一部分を抜萃して此に掲記す。是れ固より欧州東洋学研究の一斑を知るに止まるも、我邦にて東洋学を研究するの必要及び仏像館、仏書館、儒書館等を設くるの必要を知るに足る。余他日右等の諸館を設立するの意あれば、此に其意を示して読者の賛成を待たんとす。」

この報告書により、イギリスの亜細亜協会、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、イギリス・フランス・ドイツの博物館などを見学調査したという円了の足跡がわかる。そこで円了が注目したのは、仏教、儒教などの東洋学の欧州での位置づけであろう。博物館などでその實際を視察したことは、東洋哲学を提唱した円了に東洋学的重要性への確信を与えた。そして、円了は西欧の学問の奥深さに驚いたと考えられる。

つぎの書簡は、明治二十二年一月二十八日付けで、出発から半年後が過ぎたときに書かれたものである(10)。

「○井上円了氏の書簡 本会々員井上円了氏が仏国巴里府より本会雑誌委員に宛て送られたる本年一月二十八日附の書状に曰く。

昨夏米國旅行中は別段学問上に関して御報道申す程の事無御坐候。英国にては去る八月井上哲次郎氏に邂逅し、東洋哲学振起の事につき種々懇談致候。

其後、小生は英国南海地方に移り、凡そ二ヶ月余り滞留致候。其間二、三の学士に相会し、日本将来の盛衰に関しての批評等聞及ひ候。其中プロフェソル、カー氏の話に、日本は開化再興の機運に会せり。其故は古來開化の進歩毎に東より西に移る。其初、印度、支那に起り、次第に進て希臘、羅馬に及ぼし、降りて英仏諸邦今日の文明を見るに至れり。而して今後英仏の先きに立ちて世界に鳴るものは合衆國ならん。是に由て之を觀るに、合衆國の次に世界に鳴るものは日本國ならん歟。即ち開化の進歩東洋より西洋に移り、西洋より東洋に帰るの傾向

ありと云へり。

其の次にオクスフォールド大学に到りプロフェッソル、マクスミューラー氏に面し、次にケンブリッジ大学に到り印度学者プロフェッソル、カワー氏、支那学者プロフェッソル、ウエード氏、歴史学者プロフェッソル、シーレー氏に会し、東洋哲学研究の方法得失等に関して一、二の談話を為せり。龍動にては支那学者プロフェッソル、ドーグラス氏に英国博物館内に面し、氏の案内によりて蔵書室内悉く一見し、同室内に所蔵せる日本書籍をも一覽せり。次に龍動なる亜細亜協会に到り、其幹事レース、ダビッド氏に面し、印度哲学の実況を聞及び候。

龍動には仏国哲学者コント氏の教旨に本きて設立せる教会あり、毎日曜朝夕にはレリジョン・オブ・ヒュマニチーに關したる講義ある由。小生一日其会堂に到りたれども、日曜日にあらざるを以て講義を拜聴することを得ざりし。印度の仏教を講述する教会も龍動中に有之。小生一夕其教会に到り、会主及幹事に相会し候。其時の話に同教会は毎木曜日に説教会を開く。毎会凡そ四、五十人の聴衆あり。此教会の分派は英国中に十三ヶ所あり。英国中に此の教会を開きしは、其日尚ほ浅くして意外の進歩を見たりと云へり。其外、耶蘇教師には数名に相会し種々尋問したることありたれども、宗教の事のみなれば別に御報知不申上候。

耶蘇教の盛衰に關しては、小生の英米旅行の際、最も其觀察に注意したる処なるが、米国は先づ依然として盛んなる様に見受けたれども、英国は外面のみ昔時の勢力を示し、内部は余程衰へたる様に相見候。而して大陸は外面まで衰微の兆候を現したること、一目して人の知る所にて御坐候。右は小生の私考にては無之、英米周遊の人及び其地に住するもの、皆此の如く申居候。大陸旅行の事は次便に可申送候云々。」

この書簡にある円了の足跡は、前便の報告を重複するところがある。そして、同文の末に、現地で感じた欧米のキリスト教の盛衰を述べているが、この報告に対して日本の雑誌では反論が掲載されている<sup>10</sup>。

#### 四 旅行中の協力者——藤島了穂・井上哲次郎

円了の第一回の欧米視察における海外の協力者は、先の欧州からの報告にも氏名があった二人である。一人は西本願寺（浄土真宗本願寺派）の僧侶で、フランスのパリに滞在していた藤島了穂である。もう一人は円了の東京大学時代の哲学の教師で、ドイツのベルリンに滞在して研究留学していた井上哲次郎である。

藤島了穂（嘉永五・一八五二〜大正七・一九一八）は円了より六歳年上であるが、滋賀県の金法寺に生まれ、漢学・仏典を学び、明治九（一八七六）年に京都の西山教校に入学し、卒業後に宗主・大谷光尊の命を受けて東京で法律を修学し、明治一三（一八八八〇）年から本願寺派の「寺法」編纂に従事した。そして、明治一五（一八八二）年からフランスに留学し、この間に義浄の『南海寄帰伝』を仏訳し、フランス政府より勲章を受けた。七年間の留学を終えて明治二二（一八八九）年に帰国し、光尊と光瑞の両宗主を本願寺派執行として補佐した。その後、司教を経て勸学となり、教学の責任者となった<sup>20</sup>。

円了が訪ねた時期は、パリに滞在していた藤島が留学の最後を過ごしていた年であり、藤島は初めての海外滞在である円了を自分の隣に住ませ、日夜にわたり日本に哲学を興起する必要性について議論をするなど、円了の視察への協力を惜しまなかったという。

井上哲次郎（安政二・一八五五〜昭和一九・一九四四）は、福岡県の医者の子に生まれ、漢学について英語を学び、つぎに長崎の広運館に学び、明治八（一八七五）年に東京の開成学校に入学した。明治一〇（一八七七）年に同校を併合して創立された東京大学に再入学し、哲学・政治学を学び、同一三（一八八〇）年に二六歳で卒業した。文部省に勤めたのち、明治一五（一八八二）年に東京大学文学部助教教授に就任し、翌年九月から東洋哲学史の講義をおこなう。ドイツへ留学したのは一年後の明治一七（一八八四）年からである。留学期間は六年間

で、この間にベルリン大学附属東洋学校で講師を勤めてもいる。帰国は明治二三（一八九〇）年で、ただちに帝国大学文科大学教授に就任し、以後、ドイツ哲学の移入につとめ、日本の哲学界などの重鎮となる。

哲次郎は円了より三歳年上であるが、哲次郎にとって円了は、東京大学助教授となって初めて講義を担当したときの学生（円了は二年生<sup>⑤</sup>）であり、円了の提唱によって哲学会が創設されたが、哲次郎はそれを支援したという関係があった。円了が訪ねた時期は、哲次郎がドイツに滞在して四年が経過し、欧州での生活や研究が安定していた時期である。

哲次郎には留学中の動向を書き留めた日記『懷中雜記』全二冊がある。現在、東京都立中央図書館井上文庫に所蔵されている。この『懷中雜記』については、福井純子氏によって翻刻と解説がなされている<sup>⑥</sup>。その中で、解説にまとめられた「井上〔哲次郎〕留学期間（1884.4.2～1890.8.8）交際日本人名」によると、第一位は円了で、日記の中に二二か所出てくる。第二位が藤島了穩で二〇か所である。

その日記の記述を拾い出して、哲次郎と円了との関係を年月日順にまとめたものが次頁の表である。円了が欧米視察に向かう前に、哲次郎はベルリンから年二回ずつ円了に書簡を送っている。哲次郎の『懷中雜記』には発信記録はあるが、受信記録がないので、円了がどう対応したのかはわからない。

哲次郎がイギリスのロンドンに着いた円了を訪ねたのは、明治二年八月一二日である。一七日までに三回会って、仏教や学術のことを語り合い、また円了を博物館に案内している。哲次郎はその後、パリで藤島了穩に会い、さらにスイスなどを経てベルリンに帰っているので、円了とは予めロンドンで会うことで連絡ができていたと考えられる。

翌二二年三月末、円了はベルリンの哲次郎を訪ねている。藤島了穩もパリから来て同行した。哲次郎はハルト

井上哲次郎日記と井上円了

年	月 日	記 述
明治20年	5月13日	井上円了并にエンゲルブレヒト婦人に書状を贈る
	5月22日	此日井上円了氏に書状を送る
明治21年	5月24日	井上円了并に駅通通信上局に書状を送る
	5月28日	井上円了 ステフニハ モナステリオス フヒツチヒ 諸氏に書状を送る
	5月31日	井上円了に書状を送る
	8月12日	〔ロンドンにて〕井上円了を訪ひ、仏教の事を論ず
	8月16日	〔ロンドンにて〕午後井上円了を訪て、學術を論ず
	8月17日	〔ロンドンにて〕井上円了と共に British Museum, South Kensington Museum & India Museum に往て 仏像を鑑定す
明治22年	10月20日	巴里にマレスク氏并に千賀鶴太郎井上円了両氏に通信す
	12月17日	井上円了氏に書状を送る
	3月29日	〔ベルリンにて〕井上円了氏を訪て談話久し之
	4月13日	〔ベルリンにて〕ミラー女史の招状を受く、然れとも藤島円了二氏と相会し、日本仏教の事に就て相談する所あり
	4月16日	〔ベルリンにて〕藤島円了二氏共にキズチキー、ハルトマン二氏を訪ふ
	4月24日	〔ベルリンにて〕藤島円了桂林潘飛声四氏と酒肆に相会して談話す
	5月2日	〔ベルリンにて〕井上円了藤島了穂出發巴里に赴く、將に日本に還らんとする也
明治23年	6月29日	内地雜居論を著はし、井上円了氏に送る
	7月2日	此日、外山正一、渡部洪基、寺田弘、井上円了四氏に書状を送る
	7月27日	井上円了小柳津要人二氏に書を送る
	11月15日	井上円了氏に書状を寄す
	2月5日	井上円了氏に書状を送る
	3月5日	井上円了氏に書状を送る
	8月4日	井上円了氏に書状を送る

マンなどの哲学者との会談を用意し、大学附属の東洋学校の同僚教師である中国人の桂林潘氏、飛声氏と懇談する機会を設けている。一か月余りのドイツ滞在を終えて五月二日にベルリンを離れた時、哲次郎は「将に日本に還らんとする也」と思いを込めて、円了のことを日記に記している。

この哲次郎の日記にもあるように、円了も「日本と米國・欧州各国」を比較し、藤島了穩も含めて共に「日本と世界」をさまざまな角度から見直し、今後の進むべき道を語り合つたと考えられる。

## 五 帰国後

パリに戻つた井上円了は、エッフェル塔が建てられたこのときのパリ万博を見学し、藤島了穩と別れて、五月一日にマルセーユ港からフランス郵船に乗船し帰国の途に着いた。帰りは印度洋を航海し、四〇日間かかつて六月二八日に横浜浜に到着した<sup>(23)</sup>。

円了の第一回の欧米視察は明治二一年六月九日から明治二二年六月二八日まで、一年以上にわたっている。帰国後の円了が初めて書いた旅行記が「欧米周遊の大略」<sup>(24)</sup>である。

「生昨六月九日横浜を辞し、欧米周遊の途に就て以来、先づ太平洋を渡り桑港に着し、米州を通過して其風土文物を一見し、新約克港より汽船に投し大西洋を渡り、英港リバプールに着し、即日汽車に駕して英京龍動に到り、此に滞留すること凡そ三月。

是れより英国北部を遊行し、蘇國(スコットランド)に入り、エジンバルフ、グラスゴウの諸都を巡覽し、又道を南方に転じ、英国南部の海岸を周遊す。其後、オクスフォールド、ケンブリッの両大学を訪ひ、教授学士に遇ふて、哲学の景況を尋ね、再び龍動に帰る。時に十二月下旬なり。府下の氣候甚た健康に適せず。速に旅装を

設け去りて仏蘭西に移る。

京城巴里には友人藤島了穂氏ありて、生の来るを待つ。氏は多年仏京に留学して哲学を講究し、近年大に成る所あり、日本仏教史を著し、仏教哲学の高尚なることを欧米の学者に論示せり。生は氏の隣家に寓居を定め、日夜相会して日本に哲学を起すの必要を論し、帰朝の後共に力を合せて哲学館の事業を起さんことを約す。生巴里を去りて、以太利に遊ぶ。チューラン、ゼノア、ピサを経て羅馬に到る。此に止まること二週日、又去りてフロレンス、ポローン、ベネスを順見し、終りて澳太利維納(ウィーン)府に遊ぶ。尋て独逸に入りドレスデンを経て、伯林府に着す。

井上哲二郎氏(本)、亦生の来るを待つ。氏は伯林大学附属東洋学校の教員に加はり、毎日教授の傍哲学を専攻し、殆んど一家を成すの勢なり。氏亦生か哲学館を設立せる旨趣を賛成し、帰朝の後は共に力を尽くすことを約す。会々藤島了穂氏仏蘭西より来る。三人相会して哲学振起の方法を討究すること数回に及ぶ。井上氏(哲次郎)は明年夏を待ちて帰朝し、藤島氏は今年九月帰朝の筈なり。一日三人共に当時哲学の大家を以て其名あるハートマン氏を訪問す。近頃宗教哲学の著あり。生之を日本に持ち帰りて訳述せんことを告ぐ。氏大に喜び更に他の参考に必要なる書類を示せり。

五月二日、生は藤島氏と共に伯林を去り、道を白耳(ベルギー)国に取り、再び仏京巴里府に帰る。万国博覧会を一見す。十七日巴里を発してマルセル港に到り、十九日発仏国郵船に投し、帰航の途に就く。埃及(エジプト)、亜刺比亜(アラビア)、印度、支那諸港を経て、海上四十日横浜に着す。当日六月二十八日なり。

以上、周遊中の道順なり。生の是れより哲学館の事業を振起せんとする目的方法に至りては、曩に井上(哲次郎)、藤島両氏と共議する所あり。且つ生自ら欧米の大勢に接して熟考する所あれば次号の上に記載すべし。」

このような視察旅行の概要を先ず『哲学館講義録』に掲載し、予告のように次号では「哲学館改良の目的に關して意見」を發表している。その意見は三点にまとめられ、第一に「欧米各国は自国の従來の學問技芸を講究・保護しているが、これが一国の獨立の關係すること」、第二は「西洋諸國は自國の學問芸術を十分に講究する外に、余力をもつて東洋學を研究していること」、第三に「欧米各國の教育法は人の學力を養成するに止まらず、人物人品徳をもあわせて養成していること」、この三点を今後の哲学館の改良に生かすべく、東洋哲學を正科とし、西洋哲學を副科とし、寄宿舎を設けて人物の養成をはかることを述べている<sup>66</sup>。

本稿の初めで、円了自身が述べた第一回の欧米視察の目的を紹介したが、その第一は欧米各國の政教事情の調査であり、第二が欧米の哲學の実況調査であつた。

哲学館の改良はこの第二の目的を具体化したもので、正式には八月に「哲学館將來の目的」を新聞に發表し、つぎのように述べている<sup>67</sup>。

「〔日本主義の大學〕は日本固有の學問を基本とし、之を補翼するに西洋の諸學を以てし、其目的とする所は日本國の獨立、日本人の獨立、日本學の獨立を期せざるべからず。此の如き大學にして、始めて眞の日本大學と謂ふべし。」

この宣言書を通して、円了は勝海舟の知遇を得、哲学館を日本主義の大學へと發展させる第一歩として、新校舎の建設に着手する。しかし、この新校舎が暴風雨で倒壊する。すぐに再建したが、多くの負債を抱えることになり、それが翌年からの円了の全國巡講という社会教育事業に發展する。その詳細は別稿<sup>68</sup>に譲るが、学校教育の外に、社会教育を展開させた背景には、欧米視察により円了の教育觀の拡大があつたと考えられる。

つぎに、欧米視察の第一の目的である政教關係の問題について、帰國の後の円了はどのように取り組んだので

あろうか。二二年の憲法発布による信教自由（キリスト教との雑居）の問題、翌二三年の国会開設では僧侶に被選挙権が与えられないという具体的な問題があった。このような国家と宗教の関係について、仏教界には対処する方針も、参考とする欧米各国の資料もなかった。そのため、円了は先ず欧米各国の宗教事情を、帰国から二か月後の明治二二年八月に『欧米各国政教日記 上編』として哲学書院から刊行した（下編は一二月に刊行）。また、同月二二日に父の円悟に宛てた手紙で、円了は当時の状況をつぎのように伝えている<sup>⑧</sup>。

「政府には耶蘇教主義の人のみ有之。大臣参議は皆耶蘇教方と相成、本年憲法発布之時、耶蘇教自由と相成、近日社事務局も相廢し、寺院之墓地取払候様にも聞及候。寺院の境内も取上げに相成、本山管長廃止にも相成、住職僧侶の名義も被廢候は、仏教は廢滅は必然に候。」「明年国会開設に相成候も、国法にて僧侶の出席権差止められ候に付、議院出席不相成候。然るに耶蘇教家は平民の資格に候へは宣教師は出席権を有し候。」

このような強い危機感を円了は持ち、新たな制度が確立すれば、その影響は計り知れないと考えていたが、仏教界では本山も末寺の僧侶も、まったく問題の緊急性や重要性を認識せず、「実に睡るとや云はん、死するとや云はん」状態で、傍觀座視している有様であると述べている。

円了の持論では僧侶が被選挙権を獲得することは問題の枝葉に過ぎず、かえって憲法発布に対応した基本的な宗教制度を確立することが重要であり、欧米の制度には国教制と公認教の二制度が歴史的にできているので、日本の場合には仏教を公認教にすることが妥当であるという見解であった。

そして、同年九月から大内青巒と共に仏教の公認教運動に取り組み、円了は京都の各宗本山を回って、公認教の内容を具体的に遊説した<sup>⑨</sup>。こうした円了の運動姿勢に対して疑問視する意見もあった<sup>⑩</sup>。またこのときに、円了は哲学館の新校舎が倒壊するという事件に遭遇したが、公認教運動は進められ、日本の仏教界の各宗管長の

署名をもつて一大建白書が作成された。そして、内務省へ提出する前段まで至ったが、政府と仏教界を仲介する関係者などからの説得があり、建白書の提出は見送られ、政治的には内密に政府が対応することとなったと言われている<sup>①</sup>。このような運動の経過をみると、円了が第一回の欧米視察の旅行日記を「西欧の宗事情」の報告書にまとめようとした意図がわかる。

## 六 第一回欧米視察に関する疑問

明治二年一月一三日、帰国後に着手し苦難の末に完成した校舎の「哲学館移転式」において、円了は哲学館創立から「未だ一年に満たざるに、私は突然欧米周遊の途に上り」<sup>②</sup>ましたと述べている。洋行の広告は出発の約三週間前で、それから一年余りにわたり海外を旅行したのであるから、「突然」の出發としか考えられず、学校創立から一年未満という時期になぜかという疑問が出るのは当然のことであろう。

円了が欧米視察に出發した前後は、三宅雪嶺も円了も関わった「政教社」の雑誌『日本人』が創刊された時期にあたる。中野目徹氏は、「政教社では四月三日に『日本人』創刊の記念パーティを開くのですが、円了はその翌日に旅行にでかけて」「五月に東京にいたとしても、六月には欧米に旅立っていますから、『日本人』発行直後のいわば勝負の時期に、井上円了は政教社の運営に携わっていない」<sup>③</sup>と指摘し、政教社と円了の関係を再検討しなければならぬと述べている。

確かに、円了の洋行を記事にし続けていた『明教新誌』を、出發以前へさかのぼって調べてみると、四月二〇日につきのような記事がある<sup>④</sup>。

「○井上円了文学士 は去る十日に西京へ赴かれ、去る十六日より有志者の請に応し、寺町浄光寺に於て仏教

活論の講義を開かれたりと云ふ。聞く処に拠れば、氏は今度仏教院とか云へるものを設立せんと目的にて、真宗大派本願寺へ協議の為に西上せられたるなりと云ふ」

そして、また『明教新誌』の五月八日には、「○井上円了学士 は去る五日、西京より帰京せられたり」(35)、と書かれている。

この間のことについては、円了自身の『実地見聞集』第三編に日記がある(36)。それによると、四月四日に東京を出発し、名古屋を見学し、八日四時に京都の宿に入り、一〇日に東本願寺の高倉学寮へ出向き、一六日の講義までは京都の神社・仏閣・史跡をめぐるっている。一九日に東西本願寺へ参っているが、二三日以降は「休」と書いている日が多い。記録は二七日までなので、それから帰京までの一週間は不明である。

約一か月間、円了は京都に滞在していたと考えられる。さきの『明教新誌』にあった「仏教院」の設立を東本願寺と協議したのであろうか。円了の洋行に同派本山の本局用掛の宮部円成が同行したことを考えれば、この京都滞在中に欧米各国の宗教事情の調査に関することについて、東本願寺側となんらかの協議がなかったのだろうか。円了の『実地見聞録』には、それをうかがう直接的な手がかりは見あたらない。このように一般の新聞や円了の日記では、円了の洋行と東本願寺との関係はわからない。

ところが、当時の東本願寺(真宗大谷派)の機関誌(月刊)である『本山報告』に記載された円了の記事をつぎのように並べると、上記の問題を考える手掛かりがあるように考えられる(37)。

明治二〇年八月一日(第二六号)

「○本局用掛(文学士) 井上円了は、今般専門の諸学士に謀り、哲学専修の一館を創立し(中略) 仮教場を東京本郷龍岡町三十一番地に設け、九月十六日より開業する旨届出たり」

明治二二年四月一五日（第三四号）

「○文学士西上 本局用掛文学士井上円了は 御門跡〔法主・厳如〕御機嫌伺の爲め去る八日西上。同十一日 新御門跡〔現如〕の召に応じ拜謁に際、御下問に随ひ教学上の意見を奉答せり。又明日より一週間有志の請に任せ、自著の仏教活論を講する筈なり」

明治二二年五月一五日（第三五号）

「○進講 文学士井上円了は 新御門跡の内命に應じ、去月二十二日より同二十七日まで、御学館に於て宗教哲学の關係を進講。同講話中稟授以上へ陪聴を許させられたり」〔三十日に、井上円了は大学寮専門別科で教学上の講話と京都尋常中学校で教育上の談話をなす〕

明治二二年六月一五日（第三六号）

「○洋行 文学士井上円了は今般宗教に関する諸事情取調べの爲め欧州各国を巡遊する予定にて、去る九日米船〔英船〕ゲーリック号に乗込み、横浜より桑港へ向け出発せり」

明治二二年七月二〇日（第四九号）

「○進講 政教視察の爲め欧米諸国を巡遊せし文学士井上円了は去二十六日帰朝せしか、本月〔七月〕上旬御機嫌伺の爲め上京。同十日より十四日まで五日間、旧御学館に於て七大国宗教の現況等を進講せり」

同宗派の留学生であった円了は、明治二〇年の哲学館創立のときにまだ東本願寺の本山の本局用掛であり、九月の開館に先立って届出を提出している。洋行前の四月の京都行きは『明教新誌』や『実地見聞録』と合致しているが、後者の『実地見聞録』で「休」と書かれていた数日間は、「新御門跡の内命により御学館で」進講していたのである。その後、円了は欧米視察へ出発するが、そのことも機関誌で報道されている。帰国直後の七月一

○日（一四日に再び「旧御学館で七大国宗教」を進講している<sup>38</sup>。このような記事を関連させて考えると、円了の第一回の欧米視察に関して、東本願寺（真宗大谷派）がなんらかの形で関わっていたと言えるであろう。

もう一点は、円了と清沢満之の関係である。満之は円了が出発した六月以降（正式には七月九日）に、東本願寺が京都府から引き受けた京都府尋常中学校の校長に就任している。円了の欧米視察の直後に、満之は京都へ赴任という、すれちがう形でこれまで考えられてきた。筆者はこれまでの研究<sup>39</sup>で、このすれ違いに疑問をもっていた。

というのは、これまでの満之に関する多くの著書のなかで、東京から京都府尋常中学校長への赴任については、「清沢さんは、友人にも計らず、ただ独り決然として京都に行かれました」という、同じ留学生の稲葉昌丸の言葉を引用して説明する傾向があったからである<sup>40</sup>。

すでにみたように、哲学館の創立は事前に東本願寺へ届出と許可があつて、満之は哲学館の評議員となり、講師になつていた。同じ留学生の柳祐信も講師である。また、当時の満之は帝国大学大学院に在学中で、第一高等学校の講師もしていた。

東京において研究と講義をもつていた満之が、京都へ赴任するにあたり、学校関係者への了解なしに赴任することは考えられにくいのではないだろうか。実は、円了の洋行の一週間前にあたる六月二日の送別会はこう伝えられているのである<sup>41</sup>。

「○送別会 一昨日は哲学会員等が発起にて、井上円了君の欧州行と徳永〔清沢〕満之君の西京行に付き、盛んなる送別会を開かれたり」

この記事を見ると、満之の京都への赴任は六月前に決まっています、円了は満之が哲学館から離れることを了承

していたと考えられるのである。もともと、円了、満之などの東本願寺の東京留学生は、自分達で新教育にもとづく学校設立を計画していたと言われる。紆余曲折ののち、本山からの了解をとった円了の哲学館は、留学生たちの計画を実現したものとみなすことができるだろう。東京府知事へ提出した哲学館の「私立学校設置願」では、館主兼教員が円了、もう一人の教員が満之であった<sup>46</sup>。

しかしそれから一年後に、東本願寺が京都府尋常中学校の経営を引き受けることとなり、その人材を求めたときに、留学生達に京都への帰山をうながすことになったと考えられる。その計画の段階で、留学生の中心であった円了が教団首脳と話し合ったことは十分にあり得ることだろう。それが洋行前の四月の一か月間に行われたのではないだろうか。満之の京都への赴任と同時に、東本願寺留学生は哲学館から離れている。満之たちによって京都の伝統的教団へ近代教育が導入されることは、仏教近代化を指向する円了にとっても念願であったからであろう。

## 七 第一回欧米視察の旅行日録

以下の円了に関する旅行日録は、これまで述べてきた資料や『欧米各国政教日記 上・下』の「行動」に関する記述をもとに作ったものである。この他に、まだ多くの事実があったであろうと考えられる。年月日のわかる事項を先とし、不明のものは旅行地の末に挿入した。※は『欧米各国政教日記 上・下』にもとづいたものである。また、欧米視察中に掲載された円了の論文は注に記した<sup>47</sup>。

## 井上円了の第一回欧米視察の旅行日録

年月日	事項
明治二一（一八八八）年	
五月二一日	『令知会雑誌』に、哲学研究・宗教取り調べのために洋行することが報道される
五月二五日	『哲学館講義録』に告知を出し、政教の關係と哲学の實況を視察するために、欧米各国を巡遊することを關係者に知らせる。館主代理を棚橋一郎とし、講義が終結してないものは海外から寄稿すると伝える。
五月二六日	浅草本願寺別院にて八〇余名が参加して、「井上文学士欧米巡回送別会」が開催される。この席で、井上円了は日本の政教關係の緊急課題として、仏教界の二三年の国会開設への対応を訴える。夜、柳橋の柳光亭で令知会友と知友による二〇余名の送別会が開かれる。
六月二日	哲学会会員等の主催で、井上円了の洋行と徳永（清沢）満之の西京行のために送別会が開かれる。
六月六日	夕方、井上毅など内閣法制局の幹部と、哲学と宗教について意見交換をする。
六月八日	午後四時、汽車にて新橋駅を出発し、横浜に到着。
六月九日	午前一〇時、英船ゲーリック号にて横浜港を出航。今回の欧米視察には真宗大谷派の宮部円成が同行。
六月一五日	日付変更線を通過する。
六月一五日	洋上にて暴風激浪に遭遇する（日本時間の六月一六日）。
六月一七日	日曜日につき、一〇時半より船内の食堂でキリスト教の日曜礼拝あり。
六月二二日	洋上に帆走船を発見し、円了の船の全乗客が甲板にて遠望した。
	※船中で中国人と筆談し、「日本国帝王はキリスト教に改宗せりか」との質問を受ける。

	<p>※船中の遊戯大会として、ドイツ人とイギリス人の綱引きあり。</p>
六月二四日	<p>一六日間の航海を終えて、アメリカ・サンフランシスコ港に到着。</p>
六月二八日	<p>サンフランシスコにて、大陸横断鉄道に乗車して出発する。</p>
	<p>※ソルトレークに滞在する。モルモン教の教会を訪問し、モルモン教について質問したところ、同教の歴史書と多妻論の著書を渡される。</p>
	<p>デンバー、オマハを経由する。</p>
七月四日	<p>車中の暑気は一時、華氏九八度〔摂氏約三七度〕となる。</p>
七月六日	<p>シカゴ市に到着。ニューヨーク市には一週間滞在の予定。</p>
	<p>ナイヤガラ瀑布を見る</p>
	<p>〔今回、同行中に兵事に関係する人に接して、戦争の法を講じるにも哲学を研究する必要があると知る〕 『哲学館講義録』。</p>
	<p>※アメリカの諸都市には、番人なくして新聞を街上で売るものあり。</p>
	<p>※ニューヨークに滞在する。一日公園に遊び、古今の英雄、学者の肖像などの彫刻が路傍にあり、その展示が教育上に有益であると考える。</p>
	<p>※ニューヨーク港から北大西洋航路の汽船に乗る。その船が「美にして大なり」と感じる。上等船客四〇〇余名、大半はアメリカ人でフランス、スイスに観光へ行く人と聞く。</p>
	<p>※大西洋渡航の中で、一夕、音曲会あり。客中から一芸のある者を選び、順番に演じ、聴衆より五銭ないし二、三〇銭を徴収して、その金額をアメリカの慈善会に寄付すると聞く。</p>

	イギリスのリバプール港に入港し、即日、汽車にてロンドンに到着する。
八月二日	ロンドンにて、井上哲次郎の訪問を受け、仏教の事を論ずる。
八月一六日	ロンドンにて、午後、井上哲次郎の訪問を受け、学術を論ずる。
八月一七日	ロンドンにて、井上哲次郎の案内で英国博物館 (British Museum)、サウスケンジントン博物館 (South Kensington Museum & India Museum) に行き見学し、仏像などを鑑定する。
	※ロンドン博物館の仏像室を見学する。
	※ロンドンのサウスケンジントン博物館の日本器物室を見学する。
	※ロンドンのアジア協会の幹事レース・ダビッドと面会する。
	※ロンドンにてフランスの哲学者・コントの教旨による教会を訪問する。
	※ロンドンにてインド仏教の教会を、ある夕方に訪問する。
	※国教宗の僧に面し問うて聞く「貴宗の僧侶は国会議員になることを得るや」
	※イギリス人某が問うて聞く「仏教に三位一体説ありや」
	※イギリス人某が問うて聞く「日本人民は大半インドの仏教を奉信すと。果たしてしかるや」
	※イギリス人某が問うて聞く「仏教の諸宗はみな別主義をもつて宗則とし、キリスト教の諸宗は一主義をもつて宗則とはいかん」
	※キリスト教徒に面会したところ、「君はなぜキリスト教を信ぜざるや」と言われる。
	※英文にて日本の事情を批判せるものを読み、その中に「日本国王の祖先は神にして天より降りたるものなり。今に至りて国民一般に天皇を呼びて天の子と称す」という一句あるを見る。



	ケンブリッジ大学の中国学教授のウエード（ドーグラスとも言う）に友人の添田氏より預かった書籍を渡す。ロンドンの博物館にて、ウエードの案内で同館の東洋学関係の図書館と、博物館内の日本書籍を見学する。
	オックスフォード大学にて仏教学者マックス・ミュラーに面会する。
	ケンブリッジ大学にて歴史学教授・シーレーに面会する。
一二月下旬	オックスフォード大学、ケンブリッジ大学からロンドンに戻る。
一二月下旬	ロンドンからフランスのパリへ移動し、友人の藤島了穂の隣家に住む。日夜、藤島と日本の哲学を興起する必要性について議論し、哲学館の事業を起こすことを検討する。
	パリで藤島了穂とギメーの仏像博物館を見学。所蔵目録を購入する。
	※フランスのキリスト教の多くはカルバン宗に属す。実際、パリ市内の同宗の寺院を見るに、堂内には牧師の説教席あるのみにて礼壇なし。説教席の後壁に十字の印しある幕を垂れり。
明治三二（一八八九）年	
一月二八日	パリから『哲学会雑誌』委員へ書簡を送る（同誌には四月五日に掲載された）。
	パリからイタリアへ移動し、トリノ、ジェノバ、ピサを経て、ローマに至る。
	ローマに二週間留まる。
	※ローマの街上散歩の際、往来の僧侶を数えるに、前の一時間に四三人を見、後の一時間に七二人を見た
	り。
	※ローマにありて一人の僧侶に面会し、僧侶の兵役のことを聞く。



	ベルサイユへ行く。
五月一七日	パリを出発してマルセーユへ行く。
五月一九日	マルセーユ港からフランス郵船に乗り、帰国の途につく。
	※船中にキリスト教の旧教の尼、数名乗り込む。みな中国へ伝道に向かう者。
	エジプト（アレキサンドリア、スエズ）に寄港する。
	アラビア（アデン）に寄港する。哲次郎へ「内地雑居論」起稿の依頼のためアデンから書簡を送る（この原稿は明治三年九月に『内地雑居論』として哲学書院より刊行された）。
	インド（セイロン島（スリランカ）、シンガポール）に寄港する。
	※船インドに着し、その市街、民家、林園等を観察するときは、おのずからわが日本の実況を提出するに至る。
	ベトナム（サイゴン（ホー・チ・ミン））に寄港する。
	※船中、中国人と筆談を試み、中国哲学を論ずる。
	中国の香港、上海に寄港する。
六月二八日	フランスからインド洋上、海上航海四〇日間を経て、横浜港に到着し、帰国する。

【注】

- (1) 瀧田夏樹「解題 井上円了の世界旅行記」『井上円了選集』第二三巻、四七五頁。  
(2) 井上円了「哲学館目的ニツイテ」『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、一〇三頁。

- (3) 「洋行」の報道は、『令知会雑誌』(第五〇号)の他に、五月二四日の『明教新誌』(第二三七二号)、五月二五日の『毎日新聞』に見られる。
- (4) 『哲学館講義録』第一年度第一五号、明治二年五月二八日。
- (5) 『明教新誌』第二三七五号、明治二年五月三〇日、五頁。
- (6) 『尾崎三良日記』中巻、中央公論社、一九九一年、二〇二〜二〇三頁。
- (7) 『明教新誌』第二三七九号、明治二年六月八日、二〇頁。同じ広告が、「毎日、時事、朝野、報知等」に掲載されたという(『明教新誌』第二四四七号、明治二年一〇月二六日、九頁)。
- (8) 『めざまし新聞』第一〇五〇号、明治二年六月九日。真宗大谷派機関誌『本山報告』第三六号、明治二年六月一日、一頁(『本山報告』は昭和六三年に真宗大谷派出版部による復刻版、以下同じ)。この他に、加賀秀一「送井上君甫水遊干欧米」『日本人』第六号、明治二年六月一八日の漢詩がある。
- (9) 宮部円成の同行については、『明教新誌』(第二三八二号、明治二年六月一四日)、『令知会雑誌』(第五一号、明治二年六月二一日)、『教学論集』(第五五号、明治二年七月五日)が報じている。同氏の「勸令使」については、大谷大学教授の木場明志氏から、つぎのような教示をいただいた。「大谷派機関誌『本山報告』によれば、明治一九年二月二六日告達第四号で、布教使の名称を唱導使など(一〜七級)に変更し、同年三月八日付けで宮部円成は『本局用掛』のままこの唱導員(六級)に任命されている。その後、同年七月に名称は『勸令使』に改正された。勸令使とは、ある程度学事を修めた布教使であって、宮部円成は大谷派本願寺本局用掛として、井上円了と同じ部局に属し(円了は明治一八年九月八日付けで本局用掛のまま印度哲学取調掛に任じられている)、講師(大学寮の学者)・学者(普通学との兼学の学者)の下部構造である勸令使として同行したと考えられる。」
- 宮部円成(安政元・一八五四年〜昭和九・一九三四年)は、滋賀県に生まれ、得度後に前述のように本山の本局用掛のまま布教使となり、宮部の欧米キリスト教の視察は「名古屋の事業家で東本願寺の有力門徒であった神野金之助」から資金援助を受けたものである。明治三九・一九〇六年に名古屋に移転した円龍寺の住職に就任している(『真宗人名辞典』法蔵館、平成二年、三二一頁参照)。
- (10) 『国民之友』(第二四号、明治二年六月一日、四九頁)は「仏教者の洋行」のタイトルで、「近頃又た仏教の新

勇将として世にも名高き井上円了氏も亦た洋行の途に就れたる由」と述べて紹介しながら、その洋行の目的である政治と宗教の関係、なかでも宗教について、仏教家である円了が欧州の文明について実地に見聞すれば、かえって日本における仏教の維持の難しさを痛感するばかりであろうと、皮肉まじりに述べている。

(11) 『哲学館講義録』第一級第二号、明治二十二年七月二十八日。

(12) 『日本人』第九号、明治二十二年八月三日、一八〇—一九頁。

(13) 『哲学館講義録』第一級第二号、明治二十二年八月八日。

(14) 「欧米巡礼の井上君」という「在京 巴江堂主人」の意見は、円了の出発から一か月余り後に出されたものである（『明教新誌』第二四〇—一四号、明治二十二年七月二十二日、九〇—一〇一頁）。「仏教軍陣の一方面の司令官たる猛将策士とも云ふべき人物は夫れ誰人なる歟、吾人は云はんと欲す、円了井上文学士其人なり」と。「猛将は泰西哲学に精なる者なり。然れ共漠然たる政教の関係を僅々一ヶ年余りの歳月を以て、實際的に理論的に能く觀察し来りて、果して我国に巡礼したる丈の効能を示すや否や」と、疑問を投げかけている。また、この巴江堂主人はそれから二か月後にも、「怪聞あり」のタイトルで「基督教新聞」に掲載されたニューヨーク在住の理学士某の伝えるところを取り上げ、円了に面会して政教取調の状況を聞いたところ、「氏は一度も教会にゆきしことなく、ニウヨークには二日ほど逗留して直に英国に赴かれたるよし。米国の政教は二日にては分らざるべし。されば氏は自ら予は只身体保養の爲めに来るに、其取調にはまいらぬと申したるよし」を引用して、再度、円了の欧米視察への猜疑を表している（『明教新誌』第二四三四号、明治二十二年九月三〇日、一〇一頁）。

これに対して、「在京 先生」は「欧米周遊の井上円了君に望む」を公表し、評判高くかつ雄健壮快の筆を持つ円了は、「日本仏教の僧侶として欧米政教の関係を取調ぶと云へる大任を負」つているので、「君が取調べたる所の者は大要綱領を簡略に記して、月に或は五、六週間に一度づつ報告せんこと」を希望すると述べて、熱い期待を表明している（『明教新誌』第二四四七号、明治二十二年一〇月二六日、八〇—一〇一頁）。

(15) 『日本人』第二十六号、明治二十二年一月一日、三三—三六頁。また『明教新誌』第二四六四号、明治二十二年一月三〇日、四—六頁にも転載された。

(16) 井上円了「九四 前後三回の足跡」『南半球五万哩』所収（前掲『井上円了選集』第二三卷、四四〇—四四一頁）

参照。

- (17) 井上円了「欧州東洋学流行の一斑」『四明余霞』第三二号、明治二十二年一〇月二四日、一三〇〜一七頁。後に、『哲学会雑誌』第三冊第三二号、明治二十二年九月五日、三八九〜三九八頁に転載された。
- (18) 『哲学会雑誌』第三冊第二六号、明治二十二年四月五日、一二一〜一二三頁。
- (19) 「井上円了氏の書簡」『六合雑誌』第一〇一号、明治二十二年五月一日、四二頁。
- (20) 前掲『真宗人名辞典』、一九三頁参照。
- (21) 哲次郎が円了に講義した時期については、「異軒年譜」(井上哲次郎集)第八卷、クレス出版、平成一五年復刻)と『東洋大学百年史』年表・索引編とで異なる点がある。
- (22) 福井純子「井上哲次郎日記 一八八四〜九〇」『懷中雜記』第一冊、『東京大学史紀要』第一一〇号、二五〜六三頁。同「井上哲次郎日記 一八九〇〜九二」『懷中雜記』第二冊、『東京大学史紀要』第一二二号、一〜三五頁。
- (23) 円了の帰国に関する報道として、明治二十二年四月八日の『明教新誌』(第二五二二号、四頁)に「七月頃帰朝」とあり、また六月二日の『明教新誌』(第二五四八号、八頁)に「目今印度海中に在るよし」と伝えられていた。そして、実際の帰国の報道には、『明教新誌』(第二五六三号、明治二十二年七月二日、七頁)、『日本人』(第二八号、明治二十二年七月三日、二三頁)などがある。
- 因みに、宮部円成は円了の帰国より二か月前の四月上旬に帰国し、同月一五日には浅草本願寺で説教に立っている(『明教新誌』第二五二六号、明治二十二年四月一六日、六頁)。
- 藤島了穂は八月二日にロンドンで大臣・山県有朋に会い、大臣一行と共に、ニューヨーク、サンフランシスコを経由して、一〇月二日に帰国した(『明教新誌』第二六〇三号、明治二十二年九月二日、七頁と、同誌の第二六一〇号、明治二十二年一〇月六日、六頁)。
- (24) 井上円了「欧米周遊ノ大略」『哲学館講義録』第一期第二二級、第一九号、明治二十二年七月八日。
- (25) 井上円了「哲学館改良ノ目的ニ関シテ意見」『哲学館講義録』第一期第二二級第二二号、明治二十二年七月二八日(前掲『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、一〇〇〜一〇八頁)。
- (26) 『明教新誌』第二五八一号、明治二十二年八月八日、六〜七頁。

(27) 拙稿「井上円了と世界」『井上円了センター年報』第一三号、三五～五五頁参照。

(28) 井上円了「公認教問題の回顧」『護法』第三二年第二号、大正八年三月一日、三一～三六頁。大正八年は円了が死去した年で、これ以前に自らが公認教運動に取り組んだことを明らかにしていない。

(29) 『明教新誌』(第二六〇七号、明治二二年九月三日、八頁)に、「公認教制定の建白 今度各宗管長連署を以て、其筋へ公認教の制定あらんことを建白せらるゝといふ。其宗教の資格は我日本帝国に於て、百年已上布教伝道して十萬已上の信徒を有する宗教、布教伝道未だ百年に満たずとも信徒一百万已上を有する宗教、信徒未だ十萬に満たざるも布教伝道二百年已上に及ぶ宗教、尤とも其外国の教会等に隸属し、或は命令及び保護等を受くる宗教は之を除くとの旨意なりとぞ」という。

(30) 『明教新誌』(第二六〇九号、明治二二年一〇月四日、九一～一〇頁)では、時事問題として、「井上円了氏」のタイトルのもとに、「先頃帰朝せらるゝや、先づ其家<sup>みやげ</sup>は何を齎らし来られしやを案じたりしに、第一には哲学館事業擴張の端緒と為り、第二には各宗有力者(特に有力者と云ふ)請集と為る。是れと相ひ前後して世に露はるゝ者を政教日記前編と云ふ。吾人は裏面の事は委敷くは之を知らず、之を知るも委敷く之を論ずるを要せず、然れども彼の政教日記と各宗有力者請集とは自ら密着の關係を有して、公認教制定云々の問題(未だ問題と云ふまでにあらず、将さに問題と為らんと欲す)と相離れざることは事実なり」と述べて、公認教運動に奔走する円了を哲学者ではなく、「政治家殊に法教的政法家」であると批判的にみている。

(31) 井上円了「公認教問題の回顧」前掲書参照。

(32) 『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、九五八頁。

(33) 中野目徹「井上円了と政教社」『井上円了センター年報』第八号、一七頁。なお、円了の『日本人』への寄稿については、欧米視察出発の前の四・五月に、創刊号・第二号に「日本宗教論緒言」、「日本宗教論」(其一)を寄稿し、海外旅行中も九月まで同論文を寄送している。また、欧州滞在中に「坐なから国を富ますの秘法」という観光立国論を三回にわたり寄稿している。

(34) 『明教新誌』第二三五六号、明治二二年四月二〇日、四頁。

(35) 『明教新誌』第二三六五号、明治二二年五月八日、八頁。

(36) 『井上円了センター年報』第三号、五九〜六一頁。

(37) 『本山報告』中の用語について、大谷大学教授の木場明志氏から、つぎのような教示をいただいた。

「本局用掛」とは、東本願寺事務所の職制改正によって出来た職名であり、本局とは教務部・学務部・庶務部・地方部・財務部を所轄する部門である。円了は学務部の一員であったと考えられる。

「稟授待遇」とは、東本願寺事務所の職員に関して、寺務総長（執事）・参務・各部長は親選（法主が選ぶ）、次のレベルが親授で法主から辞令を受ける職、その次が「稟授」で寺務総長から辞令を受ける職を言う。「稟授待遇以上に陪聴を許す」とは、稟授・親授・親選の者に聴講を許したことを意味する。

「御学館」とは仏教学館というもので、京都の真宗大学寮の予備門であり、大学寮専門別科や付属科へ入る者のための学校であった。本山前の七条地内に設置されていた。

(38) この西京行きの出発は六日であったという（『明教新誌』第二五六七号、明治三二年七月一〇日、七頁）。

(39) 拙稿「井上円了と清沢満之」「井上円了センター年報」第一二号、三七〜六九頁参照。

(40) 教学研究所編『清沢満之―生涯と思想』真宗大谷派宗務所出版部、平成一六年、二二頁。

(41) 『明教新誌』第三三七七号、明治二十一年六月四日、八頁。

(42) 「私立哲学館設置願（明治二〇年七月二二日）」（前掲『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、八四〜八六頁）。